東南アジア研究　28巻3号　1990年12月

バングラデシュの<むら>と<まち>のインターアクション

海　田　能　宏,*　ケシャブ・ラル・マハラジャン**

Rural-Urban Interaction and Its Implication for Rural Development in Bangladesh

Yoshihiro KAIDA* and Keshav L. MAHARJAN**

The pattern, mode and phase of rural-urban interaction are strikingly different between the lower Meghna floodplain in Chandpur district and the Barind tract in Bogra district. In our study villages in Chandpur, we found that villagers were quite mobile, with the majority of households being employed in the nonagricultural sector, and also involved actively in markets and marketing systems. In the Barind tract, on the other hand, the villagers were "land-locked," and their interaction with the outside world was single-faceted, consisting in their marketing of surplus rice.

Recent changes in national occupational structure in Bangladesh are mainly due to structural changes in rural areas, where there has been an increase in nonfarm jobs such as sales, services, transportation and other productive work. This was certainly true in the Chandpur study villages. People employed in the nonagricultural sector play a vital role in linking rural areas with urban centers. The money they remit is spent in farming and daily village life, thus augmenting the stability of rural life. In the rural occupational structure, the choice of farm and nonfarm occupation and changes therein have a close relation with the places and patterns of employment, education level and age of employees. However, in the Bogra study village, the only linkage with urban centers are through the medium of marketing systems and education of the spouses in the local towns.

The distinct difference between the two areas studied may partly be explained by the difference in agricultural systems. The village in the Barind tract is a typical rice-surplus area, where rice production is managed by large and medium farms, which comprise 60 percent of all households. Rice farming is the core of all the activities, including economic activities in this village. On the other hand, farm households in Chandpur villages are all equally small, with very few landless farm households and almost no large farms among them. Their rice production is mainly for home consumption, and their household economy must rely heavily on nonagricultural sources of in come .

I　はじめに

バングラデシュの人口の8割ほどは農村に居住し，3分の2ほどが自作，小作，あるいは農業労働者として農業に従事している。農家世帯あたりの平均農地保有面積は2エーカ

*京都大学東南アジア研究センター；The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
**広島大学総合科学部；Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University, Higashi Senda-machi, Naka-ku, Hiroshima 730, Japan

ー程度であるが，階層化が進み，大土地所有者がいる一方で，0.5エーカー以下の実質的に農業経営で生活をたてることができない極零細階層を入れると，土地なし農家世帯が約半数を占める。また，本特集の宇佐見・ホセイン論文で明らかなように，農外収入を農業経営につぎこまないかぎり，とくに乾季の集約的な稲作・野菜作などの経営がなりたたないという現実がある。一方，他の発展途上国と同じく，首都圏への急激な人口集中とそこでの貧困雑業層の急膨張が憂慮されており，半面地方の中小都市の発展が遅々として進まないという嘆きもきかれる。

上のようなマクロトレンドおよび統計値などから，バングラデシュの社会と経済を特徴づける絶対的貧困のイメージが次のように描かれることがある。すなわち，大農あるいは商業資本によって搾取された極零細農階層はついには農地を失い，多くの者は村を押出されて都市へと漂泊し，結局は首都ダッカのスラムに吹き寄せられて，不安定きわまりない都市雑業部門に埋没してゆく。ダッカのあのひしめきあうリキシャの群はその象徴的な風景である。工業化に立遅れた経済のなかで，非生産的な過剰人口が首都圏へ集中してゆく現象の典型例がバングラデシュにみられるという見解である。[1] しかしながら，筆者らは，これは必ずしも正鵠をえた観察ではないように感じている。

地方および農村の発展が，農業部門の成長によってもたらされるというような見解は，バングラデシュでは幻想にすぎない。われわれも，農村の発展は＜まち＞とのインターアクションの中に求められなければならないということをうすうすとは感じている。この場合，将来の地方・農村発展を予測しまた計画するにしても，現状における＜むら＞と＜まち＞の相互交流の社会・経済的な深さ，心理的な垣根，地域的な広がりなどを把握し，それらが村びとの生活にどんな関わりをもっているかということをしっかりと理解しておく必要がある。また，その相互交流には大きな地方格差があることは一見して明らかであるが，その差は何に基づくものであるかを分析する必要もある。

上のような問題意識をもって，本報では2地方の3つの調査村落における＜むら＞と＜まち＞のインターアクションの側面をとりあげて若干の分析を試みる。

＜むら＞と＜まち＞のインターアクションと言えば一般的に次の6つのチャンネルを思い浮べることができる。

(a)市場（まちの常設市あるいは定期市，村むらの定期市，行商人）を通した人，金，物材および情報の交換
(b)非農業職への就業による直接的な外界との接触および留守家族との送金，情報交換を通じた接触
(c)地方行政役場，中央政府機関の地方出先，農協中央会，銀行のスタッフを通した情報，技術，あるいは公的融資機会等の流れ
(d)地方中心都市における子弟の学校教育（通学または寄留）
(e)親族訪問，宗教的行事あるいは地方の祭などの機会における人の交流
(f)テレビ・ラジオ・新聞・雑誌等マスコミを通した外界との接触

研究の対象として選んだひとつの地域は西北部のボグラ県のT村であり，他は東南部のチャンドプール県のF村ならびにG村である。T村は，バリンド台地と呼ばれる低い台地上に位置し，1970年代終りごろから普及し始めた浅管井揚水灌漑により，従前のアマン稲単作からボロ稲を含む水稲二期作へと脱皮し

1）このような見解の代表として，渡辺利夫『成長のアジア停滞のアジア』（第6章「絶対的貧困の機構と構造」pp. 175-206）東洋経済新報社，1986がある。

表 1　調査対象村落の概要

	ボグラ県	チャンドプール県	
	T村	F村	G村
世帯数	153	212	100
農家世帯数（%）	136（89）	209（99）	99（99）
大農（%）	20（13）	2（1）	0（0）
中農（%）	73（48）	22（10）	5（5）
小農（%）	43（28）	185（87）	94（94）
非農家世帯数（%）	17（11）	3（1）	1（1）
農業労働世帯数	〔9〕	〔135〕	〔29〕
農地所有のジニ係数	0.xx	0.63	0.46
農地面積（エーカー）	587	221	106
灌漑面積（%）	407（69）	127（57）	83（78）
農家世帯あたり面積（エーカー）	4.3	1.1	1.1

注）大農保有面積7.5エーカー以上
　中農保有面積2.5エーカー以上7.5エーカー未満
　小農保有面積0.05エーカー以上2.5エーカー未満
　統計では土地なし層＝非農家（nonfarm）と定義されている。
出典：*The Bangladesh Census of Agriculture and Livestock: 1983-84. Zilla Series, Bogra and Chandpur*. Bangladesh Bureau of Statistics, 1989.

た純農村である。<まち>とのインターアクションは余剰米と生産資材・日用品とを交換する「市場」を通じてのみ成立している。一方，チャンドプールは隣接するコミラならびにノアカリ県と並んで，農地に対する人口圧が極めて高く，以前から近在のみならずダッカをはじめ全国へ出稼ぎ人を出す地域として知られており，F村ならびにG村とも例外ではない。

上に述べた2地域の特徴は，表1の調査村落の概要によっても裏づけられよう。

2地域の村と<まち>のインターアクションにかかわる差異は一見して明らかであったので，各々に適した，異なった調査方法を採用した。ボグラのT村では，近在，とくに地方中心都市であるシェルプールの町（Paurashava）の定期市への村びとのかかわりあいを網羅的に調査する一方，それに加えて<まち>的要素を村に運びこむいく人かの人たち，例えば学校教師，村医師，露店商，行商人などの一種のライフヒストリーを再現するべくインタビューを行なった。チャンドプール県のF村ならびにG村においては，農外就業者について悉皆的に把握し，彼らと留守家族とのつながりを明らかにするために，全戸を訪問した。ただし，<まち>に住みついている人たちの追跡調査を行う余裕はなかった。

II　ボグラのT村——米経済中心の村

1.　地方の拠点都市との経済的なつながり

米経済

T村が位置するレベルバリンド台地は，ジョムナ河の氾濫原から比高にしてわずか数メートルばかり高い，ほとんど平らな平野で，洪水被害にあうことも少なく，表土は粘土に富むことから，雨季には安定したアマン稲を産する。乾季には強く乾燥し，稲はもちろんラビ作物も育たない，伝統的には，典型的なアマン稲一作地帯であった。ところが1970年代の終りごろから浅管井揚水灌漑が導入されると急速に普及し，今ではT村のみで42基も

設置されており，専らボロ期の稲の灌漑に用いられている。東南部地方などと比較すると，もともと農家世帯あたりの農地面積がずっと大きなこの地域で水稲二期作がはじまったものだから，この地方は一挙に米の余剰を生み，米の移出地帯になった。一方，農業労働力は不足しており，農繁期にはジョムナ河の氾濫原地域から多くの労働者を移入している。

T村の経済は，単純化すると，米を売って生産資材ならびに日用品を買うという「米経済」に特徴づけられる。乾季の灌漑稲作は生産資材の購入に多額の支出を必要とする。例えば管井の打込み，揚水機の購入と修理，ディーゼルエンジンの燃料，肥料と農薬，それに労賃である。こういう資材のすべてが，今ではシェルプールの商店・定期市か近在の定期市を通じて調達される。

外界との接触

市場を介在した外界との接触を除くと，他のチャンネルは全く取るに足らないといえる。出稼ぎに出た家族員からの送金をあてにしている世帯は皆無である。[2] 中央政府の末端のサービス機関として，例えば農業改良普及事業があるが，その末端のエージェントである農業普及員（Block Supervisor）の活動は，この村では誰にもほとんど知られていない。KSS-UCCA という単位農協—郡農協中央会の組織は一応つくられてはいるが，それを名目的に組織した村の有力者のうち4人がその地位を利用して揚水機購入のローンを得た後は，組織自体が有名無実になっていることは，バングラデシュの他の地域とかわりない。国立農業銀行などの出先の職員とは揚水機購入の公的ローンを得るために接触する必要があるが，こう考えるのも村のいく人かの有力者に限られており，大衆には関係のないことのようである。事実この村の管井灌漑施設のうち，農業銀行の融資を受けて設置した16件については所有者の平均土地保有面積が6.25エーカーであるのに対し，自己資金あるいは私的な融資によった11件の平均保有面積は2.5エーカーと，大きな差がみられた。より豊かな階層により条件のいい公的融資がまわされるという，いかにもバングラデシュ的な図式はこの例からでも明らかである。

村びとの行動範囲はきわめて限られている。後で述べるように，9キロメートルほど離れた地方の中心の町であるシェルプール町までは，男性にとっては米を売りに出たり，生産資材と日用品を購入するためにほとんど毎週のように訪れるところであり，女性にとっても，病院通いや親戚訪問のために訪れる機会があるごく身近な場所であるが，この範囲か，せいぜいボグラ県の首都であるボグラ市までであって，この2都市を越えると，急に縁遠くなるようである。

T村はつい最近までユニオン[3] の議長をだしていた村であるが，今回の地方選挙でユニオン議長はおろか議員選挙にも破れたことから，村びとたちは向う何年かはユニオンの政治舞台のつんぼ桟敷に置かれるであろうと，

2）以前，この村では小農に属する一家の娘がダッカの衣料縫製工場へ働きに出ていて，いくばくかの送金をしてきていたことがあるが，彼女がダッカで結婚してからはその送金も途絶えた。これが唯一の事例である。

3）バングラデシュの行政単位は上位から国—地方（division）—県（district）—郡（upazila）—ユニオン（union）—ワード（ward，選挙区に相当）—モウザ（mouza）である。ユニオンは19世紀末から存在し，議長ならびに9人の議員は普通選挙で選ばれる。1982年以来，郡が地方自治体の中心的単位となり，郡議会の議長は普通選挙で選出されるようになり，議員は郡内のすべてのユニオン議長が兼任する。なお，正式な行政単位はワードまでである。モウザ（mouza）は英語で revenue village と訳されるように，イギリス植民地時代にできた集落単位で，地租徴収の単位である。グラム（gram）は自然村に近い集落単位。なお，佐藤宏編『バングラデシュ低開発の政治構造』アジア経済研究所，1990を参照。

半ばあきらめの心境である。面白いことに，この議長は雨季にかぎってはずっとシェルプールに町住まいをして執務していた。というのは，関係集落（38モウザあるいは55グラム）[4] はそれぞれが道路で結ばれているというわけではなくて集落間の経済的交流はほとんどなく，ユニオンの中心となる集落があるわけでもなく，道路はむしろ各集落とシェルプールの町を結んでおり，各集落はこの町と個々に経済的に結ばれているわけであって，ユニオンがひとつの経済圏をなしているわけでは決してない。雨季にはこういう地方の道は泥濘化し，オートバイもまた大きな車輪をもった牛車すら難渋するのである。また，主な行政サービス機関はシェルプールの町に置かれているから，物理的に，行政的に，そしておそらくは心理的にも，中心地はシェルプールウポジラではあっても，ユニオンの議長がいる場所ではないからである。

ちなみに，T村にとって必要な行政サービスへのアプローチは，必ずしも村落→ユニオン→ウポジラという行政的チャンネルに頼るのではなくて，伝統的な権威機構，すなわち村のマタボール[5] の合議をへて，例えば電化計画の促進のために直接に農村電化局にはたらきかけたり，また村道の道普請を勤労奉仕でやりとげるなどの経験をもっている。

2. 市場経済圏とT村

<むら>と<まち>のインターアクションということに関しては，T村の住民はシェルプールの町とのみ，経済的な絆一本で結ばれているとみることができる。その経済的な意味を探るために，次にシェルプールの定期市，商店ならびに近在のいくつかの定期市の機能と，T村の村びとの関わりあいを具体的にみていこう［Kaida 1990］。

T村の村びとが関係する市場は（a）シェルプールの町の毎週月・木曜日の定期市ならびに（b）同じ日に開かれる米穀市場，（c）常設の商店街，（d）シェルプールにほど近いミルザプールで毎週水・土曜日に開かれる米穀の定期市，それに（e）隣村のジャマイル村における毎週火・金曜日の定期市などである。

シェルプールの定期市

シェルプールの町の定期市は，郡内第一の市で，川に沿った町の中心部の一画を，ほとんどありとあらゆる商品を扱う1,200ほどの露店が埋めつくすさまは壮観である。週1回は家畜市も併設される。郡内一円の顧客を対象としており，市の日にはT村からも成年男子の姿がほとんど消えてしまうほどである。ただ，売手としては，T村の村びとの参加は，米穀の販売を除けばごく消極的であり，1989年1月初旬のある日の調査結果では，肥料・農薬商と衣料商各ひとりのみであった。売手の大半，しかも常設的な店舗を構えるのはほとんどシェルプールの町の住人であり，他にも町の周辺の村落からの者が多い。衣料商の多くはボグラ市からくる。しかし，商品によって売手の出身地が特定化しているのは特徴的現象で，例えば鮮魚は養殖で有名な隣県から，食堂経営，素焼土器，きんまの葉などの産物はそれぞれ特定の村から売手が出ている。

T村で生産される余剰米，とくにボロ稲の大半がここの米穀市で取引される。村びとたちは牛車を連ねてシェルプールの町なかの国道沿いの青空市へとおもむき，そこでシェルプール，遠くはパブナあるいはダッカ方面からくる米穀仲買人と即金の取引を展開する。1989年1月の，アマン米の取引の最盛期のある日の調査によると，街道沿いに約1キロメ

4）本ユニオン内のモウザならびにグラムの数は特別に多いようで，シェルプールウポジラの平均は1ユニオンあたり25モウザ，36グラムで，全国的にはもっと少ない。

5）マタボール（matbor）：伝統的な村落の指導者であって，一般的にはイスラム教にのっとった宗教的な生活規範によって村民を指導監督する立場にある長老あるいはそのグループである。

ートルにわたって，700台を越える牛車の賑わいを観察することができた。

シェルプールの常設商店街

シェルプールの町は，その東郊を流れるカラトヤ川の舟運によりすでに18世紀半ばごろから栄えていた市場町であり，ボグラ県でも最も古い＜まち＞のひとつである。いまでも商業活動の中心はその川岸に集った農産物の集荷・卸売を業とする「老舗組合」(113店舗）であるが，1960年代にバングラデシュの西北部を縦断する一級国道が町の西郊を貫通するようになってから，とくに1980年代に入ってからは，雑貨，薬品，電化製品，ポンプ，オートバイや自転車の販売と修理，トタンなどの建材をあつかう商店，それに食堂などが国道沿いに集中するようになり，「バス停商業組合」(211店舗）を結成するにいたり，活気という点では町の中心はいまや後者の方に移ってきた。他に，先に述べた定期市（場所は老舗商店群のなかにある）と，規模は小さいながら銀細工の工房（20工房）が集る地域の合計4つのグループがこの町の商業活動を支えている。

村びとたちの接触の程度は，表面的にはなんと言っても定期市が一番であるが，彼らが定期市に持込む地域の農産物，とくに米穀，菜種油，それに生鮮食料品以外のほとんどの食料品の流通は，実際には上記の老舗組合の商人たちに牛耳られているわけである。農業経営の資材の調達においては，バス停商業組合傘下の国道沿いの商店に出入りする農民が増えつつある。

シェルプール町と近在の農村地域との商取引ならびにウポジラとしての行政サービスは年々急速な伸びを示しているが，人口は12,000人ほどであり，1960年代以降増え続けているとはいえ，その伸びは遅々たるものである。というのも，他の中小都市と同じく，町および近郊には米のパーボイル加工場と菜種油の搾油工場をのぞいて工業は立地しておらず，工業部門における人口吸引力はほとんど無に等しいのである。

農村の定期市

農村部に位置する定期市のひとつであるジャマイル定期市は明らかにシェルプール市場の下位に位置づけられ，売られている商品もシェルプール市場などで仕入れられてきたものが多い。しかし，近在の日用品需要の極めて多くの部分を取扱っているようで，露店の数は250を下まわらず，商圏はこのユニオン全体に及んでいる。T村から徒歩20分程度のところにあり，T村の人たちも買手としてのみならず，売手として活躍しており，1988年12月のある日の調査では，肥料・農薬商(1)，衣料商(1)，雑貨屋(3)，野菜売り(3)，ビンロウジュときんまの葉売り(1)，菓子売り(1)，散髪屋(1)とそれに籾・米を肩にかついだり自転車や牛車に積んで売りにきた者25人程を数えることができた。米穀仲買人たちはほとんど例外なく，次の定期市の日にはシェルプールやミルザプールの米穀市で売出すか，あるいは即日にシェルプール郊外のパーボイル米加工業者に売りさばいたりするわけで，いわば米穀の地方内での流通の末端をつかさどるのである。

T村にも，米穀仲買人をはじめ，商品を天秤棒に担いだ，衣類，下着，台所用品，菓子その他いろんな商売の行商人まで多くの商人が訪れ，それぞれに商いをする。米の収穫期には商品が米と交換取引されることが多い。米取引に関しては，3分の2がシェルプールをはじめとする3カ所の定期市で，残りの3分の1がこれらの訪問仲買人と取引される。

なお，ジャマイル等近在の定期市では，商取引の他に，村びと間の情報交換も繁く行われ，子弟子女の結婚のはなしの多くもここでまとまるという。

3.　T村における非農業就業の事例

この純農村において非農業職に就いている

村びとたちについて，ここで詳しく検討する紙数がないので，ごく簡単に5つの事例をあげるにとどめたい。

村医

A氏（大農兼村医，36歳）　土地所有は7エーカー，この村でも大農に属し，親族集団の長老格であり，村にどっしりと腰を下ろした生活ぶりは周囲の信頼をかちとっている。9年前，シェルプールで2年間の農村医療プログラムの研修コースを受けて医者になった（正規の医学士ではない）。本格的な農業経営のかたわら行う診療・投薬からの収入は月1,000-1,500タカ（1タカは約5円）であるから，農業収入からみるととるにたらない程度であるが，彼は息子のひとりを医者にしたいと思い，シェルプールに家を持ち，将来息子にはそこから学校に通わせたいと思っている。彼自身はいまの村での生活に満足している。

教師

B氏（大農兼小学校教師，58歳）　1952年に教員免許を得て，以来近在のいくつかの村むらの小学校教師を経験し，現在は隣村の小学校長である。月給は2,800タカである。父親から4エーカー弱の土地を相続したうえに，自分でもいろいろな機会に合計12エーカーの土地を買い集めたので，今では村で5指に入る大農である。農業経営は息子ふたりにまかせているが，2年後に退職すれば，農業経営に専念したい。しかし，幸いにシェルプールの町に小さな宅地を相続しているので，家を建て，息子にはそこで商業を始めさせたいと考えている。彼自身は村にとどまり，村むらの親や子供たちに教育の大切さを説いてまわり，今の嘆かわしいばかりに低い教育水準（例えば彼によれば真の小学校就学率は10%にすぎない）を何とか改善するのが，自分の天職であると思っている。

農業資材商

C氏（中農兼肥料・農薬商，32歳）　富裕な家に生れ，シェルプールのカレッジ在学中に町の雑貨屋で働いて，卒業後は実兄のもつ肥料店で7年間修業し，肥料・農薬商のライセンスを得，7年前にいくばくかの蓄えを元手に肥料商をはじめた。肥料・農薬を手広く商い，シェルプールやジャマイルの定期市にも必ず出店する。また農業経営にも熱心で，ボロ期には借地も入れて13エーカーばかりの経営をする。シェルプールに家土地を買い，将来は農機具の修理工場を経営したいと計画している。また，商売や青年会のスポーツ事業の後援などで培った知名度を活かし，近々ユニオンの議員選挙に打って出たいと考えている。

雑貨商

D氏（小農兼雑貨商，25歳）　10歳のとき，生れ故郷の村がジョムナ河の氾濫で押し流されてしまった年，その村の人たちに連れられて農業労働者としてこの村に流れてきた。まだ子供だったので，この村の雑貨屋に家畜の世話兼店の手伝いとして雇われて，以来15年近くこの仕事を続けさせてもらい，20歳のとき雇主の親戚の娘と結婚し，つい去年，妻方の遺産である家屋敷（村の入口にある）の一部で小さな雑貨屋を開店した。小金を蓄えて0.5エーカーほどの農地を買い，他に借地経営もしているので，米はなんとか自給できている。長年の顔で，シェルプールの店からはツケで品物を仕入れることもできるので，この雑貨店経営と，ジャマイル定期市での商売もなんとか軌道に乗りそうである。将来は，この小さな商売を大きくしてゆくのが夢である。

菓子売り

E氏（小農兼菓子売り，26歳）　小金を貯めて手にいれた0.25エーカーの土地と，老父のわずかの土地を経営するかたわら，家族総出で菓子をつくり，彼とその弟がジャマイルなどの定期市へ売りに出している。彼自身は天秤棒を担いで村内や近隣の村むらを売り歩

くこともいとわない。定期市での売上げと振り売りを合わせると月5,000タカにはなり，純益は1,000タカほどである。これで家族7人（両親，妻，弟ふたり，妹）が何とか暮しをたてている。彼は菓子づくりを実兄から教わり，6年前から資本金3,000タカで自立してこの商売を引継いでいる。単なる夢であるが，将来はシェルプールの町で菓子屋を開きたいと思っている。

T村では，比較的富裕な階層の中から，中等・高等教育をおえて，村医者，教師，商い（衣料，肥料・農薬，雑貨）のような比較的安定した非農業職に就くケースが目立つが，一方，上のD氏やE氏のような例がないわけではない。インタビューに答えてくれたすべての非農業者に共通した特徴は，在村傾向，すなわちこの村に腰を落着けた生活を望んでいることであった。

4.　農村開発

商品の流通，とくに米穀のそれを阻害する第一の要因は，先にも述べたように，交通状況である。雨季に道が泥濘化すると，あの大きな車輪をもった牛車すら立往生し，徒歩か自転車に頼らざるをえず，T村とシェルプールのわずか9キロメートルの距離も途方もなく長いものと感じられ，村むらは「陸の孤島」となってしまう。とくにボロ米の出荷に難渋する。農村開発に何を期待するかとの設問にすべての村びとがシェルプールへの道路の改良と答えたのはこの間の事情を物語っているのであろう。

さらに，村びとにとっての農村開発とは，彼らの答えに即して言えば，高等学校（日本の中学校に相当），マドラサ(イスラム学校)，銀行の支店，保健所の支所，家畜病院の支所，揚水機の修理などができる鉄工所など，いわば＜まち＞的なサービスが村の中に入ってくることをイメージしている。しかしながら，これらはただの夢であって，行政がこんなサービスをしてくれると期待しているわけではなさそうで，いま起っている実際の変化は，大農層，いわば村の旦那衆が競ってシェルプールの町に土地・家を投資していることである。町の家は，いまのところ子弟が高等学校・短大・教員養成大学に通学する足掛り程度に利用されているにすぎないが，将来は市場経済にもっと有利に参入したい，また＜まち＞の文化的な空気にもっと触れていたいという，現実的な願望の表れであろう。

Ⅲ　チャンドプールのF村ならびにG村——通勤と出稼ぎの村

1.　非農業就業状況

非農業職種

チャンドプールのふたつの村の人たちの外界との接触の様態は，ボグラのT村とはがらりと異なる。土地持ち非農家世帯のすべて，兼業農家世帯のほとんど，そして土地なし非農家世帯のかなりの世帯においては，家族員の少なくともひとりは非農業職への就業を通じて村外の世界との接触を常時保っているのである。非農業就業者をもつ世帯はF村の世帯の70%，G村では実に90%にも達している。また，F村の有業者の46%，G村の50%の者が何らかの非農業職業に就いているわけである。

彼らの職種は次のように多岐にわたっている。表2および表3にF村とG村の非農業就業者の職種，就業地，出身世帯の土地保有，本人の学歴を一覧表にしてまとめた。

1.　管理職（中・高級官吏，会社支配人）
2.　教員（学校教員，イスラム教師）
3.　下級官吏
4.　民間の俸給勤労者（ランクとしては下級官吏に相当）
5.　仲買・卸売商（仲買人，卸売商，店舗をもった小売商）

表 2 農外就業の職種，就業場所，就業者の土地所有ならびに教育水準状況
チャンドプールF村（輪中堤外側）

	就業場所					土地所有						教育		
	計	通勤	県内	ダッカ	他	LL	MG	SF	MF	LF	NON	なし	初等	高等
1. 管理職	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2. 教員	18	13	2	2	1	2	5	4	4	—	3	—	—	18
3. 下級官吏	5	—	3	—	2	1	1	1	1	1	—	—	4	1
4. 民間俸給勤労者	26	—	2	17	7	2	12	3	3	3	3	—	13	13
5. 仲買・卸売商	13	8	2	2	1	1	—	4	3	5	—	1	8	4
6. 官庁雇員	19	1	9	4	5	3	11	2	1	—	2	10	9	—
7. 民間俸給労働者	16	1	—	7	8	4	8	4	—	—	—	10	6	—
8. 露店商	27	20	5	2	—	1	12	12	2	—	—	16	11	—
9. 行商人	7	6	—	—	1	—	5	2	—	—	—	1	6	—
10. 船員	15	1	2	2	10	2	12	—	—	—	1	13	2	—
11. 大工	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
12. リキシャ引き	9	8	1	—	—	2	5	1	—	—	1	7	2	—
13. 日雇い労務者	18	1(1)	2	3	12	6	3	2	—	—	7	15	2	1
14. その他	5	5(5)	—	—	—	4	—	—	—	—	1	5	—	—
小計	178	64(6)	28	39	47	28	74	35	14	9	18	78	63	37
15. 自営農業者	148					—	67	56	13	12	—	75	61	12
16. 農業労働者	59					15	31	6	5	—	2	50	8	1
合計	385					43	172	97	32	21	20	203	132	50

注）土地所有 —LL: Landless（土地なし）; MG: Marginal farm（1エーカー以内）; SF: Small farm（1.01-2.5エーカー）; MF: Medium farm（2.51-4.0エーカー）; LF: Large farm（4.01エーカー以上）;
NON: Landed nonfarm households.
—土地保有面積による階層分割はチャンドプール地方の実情にあわせているので，表1の全国一律の階層分類とは異なることに注意。
—MG と SFが本文の小農に，MF と LF が中農に相当する。
教育　初等教育は class 9 を修了した者。高等教育は HSC カレッジ以上修了した者。
（ ）内は女性就業者数

6. 官庁雇員（給仕，ガードマン，門番）
7. 民間の俸給労働者（ランクとしては官庁雇員に相当）
8. 露店商
9. 行商人
10. 船員（内・外航の貨物船水夫，内航のフェリー船員，渡し船の船頭）
11. 大工
12. リキシャ引き
13. 日雇い労務者（レンガ焼き，道普請）
14. その他（住込の下男，女中）

就業場所

非農業職の内F村では64人（35%）のものが，G村では23人（25%）が通勤圏にある当該ユニオン，近隣のユニオン，あるいはウポジラ内に職を得ている。こういう職種を件数の多い順にあげると，F村では露店商(20)，教員（13），仲買・卸売商(8)，リキシャ引き(8)，行商人(6）であり，G村では教員(7)，仲買・卸売商(6)，下級官吏(2)，露店商(2)，その他である。

離村はしても，つい近くの同県内のチャン

表 3　農外就業の職種，就業場所，就業者の土地所有ならびに教育水準状況
チャンドプールG村（輪中堤内側）

	就業場所					土地所有						教育		
	計	通勤	県内	ダッカ	他	LL	MG	SF	MF	LF	NON	なし	初等	高等
1. 管理職	2	—	—	2	—	—	—	—	—	—	2	—	—	2
2. 教員	16	7	3	2	4	—	4	5	1	—	6	—	—	16
3. 下級官吏	27	2	1	18	6	1	12	4	—	—	10	—	11	16
4. 民間俸給勤労者	9	1	—	1	7	—	2	3	1	—	3	—	6	3
5. 仲買・卸売商	17	6	—	4	7	1	8	7	—	—	1	1	9	7
6. 官庁雇員	6	—	—	1	5	—	4	2	—	—	—	1	5	—
7. 民間俸給労働者	6	—	—	1	5	1	3	2	—	—	—	1	5	—
8. 露店商	2	2	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	2	—
9. 行商人	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10. 船員	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
11. 大工	5	2	—	2	1	—	5	—	—	—	—	1	3	1
12. リキシャ引き	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
13. 日雇い労務者	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
14. その他	3	3	—	—	—	1	—	—	—	—	2	—	1	2
小計	93	23	4	31	35	4	40	23	2	—	24	4	42	47
15. 自営農業者	62					—	28	31	3	—	—	21	25	16
16. 農業労働者	21					3	16	2	—	—	—	15	6	—
合計	176					7	84	56	5	—	24	40	73	63

注）表2と同じ

ドプールの町とかハジゴンジ[6]の町で職を得ている者たちの職種は，F村ではジュート工場の工員(12)，露店商(5)，チャンドプール港の貨物船船員(2)，教員(2)をはじめ，他にわずかの民間俸給勤労者，仲買・卸売商，日雇い労務者もいるようである。G村からは，わずかにふたりのイスラム教師がチャンドプールの町に住み込んでいるばかりである。チャンドプールで勤務している残りの二人，教員と下級官吏は村から通っている。

ダッカおよび首都圏に出ているものは，F村の非農業就業者の22%で，G村ではそれは35%に達している。F村出身者では，いわゆる俸給生活を保証されているのは例えば商店販売員(8)，ホテル従業員(4)，ガソリンスタンド従業員(2)，印刷会社従業員(2)，食用油会社勤務(1)などであり，他にジュート工場の労働者(7)，銀行や製茶会社の小使い(4)，日雇い労務者など(3)となっている。一方，G村出身者では，製靴会社の支配人(1)，政府高級官吏(1)，イスラム教師(2)，仲買・卸売商(4)〔衣料店経営(2)，雑貨屋経営(2)〕，フェリー公社やジュート工場や銀行，保健所，職業訓練所の中級従業員(18)，大工(2)，ガードマン(2)などをあげることができる。

F村から遠く地方都市までも出稼ぎに出ている者たちをたどると，チッタゴンではレンガ工場や冷蔵倉庫に勤務する労働者(10)やその他の俸給労働者(5)を，クルナでは貨物船船員(10)，下級官吏(3)など，さらにシレッ

6）チャンドプールはチャンドプール県の首都で，内航船の大きな港町で，ハジゴンジは約1時間で行ける当地方の主要な町。

表 4 非農業職の就業地

	F村 件数%	G村 件数%
ユニオン・ウポジラ内	64(36)	23(25)
チャンドプール県内	28(16)	4(5)
ダッカ	39(22)	33(35)
その他	47(26)	33(35)
合　計	178	93

トというバングラデシュの東北部の辺境にも食料貯蔵センターや茶園エステート勤務の下級従業員(3)，日雇い労務者(2)を見出すことができる。彼らはF村の非農業就業者の26%をかぞえる。G村からも多くの人たちが職を求めて地方都市域へ出稼ぎに出ている。チッタゴンでは俸給勤労者(2)，郵便局員(2)，雑貨店経営(4)，食堂従業員(2)，貯木場勤務(1)，園丁(1)などの他，他のマイメンシン，クルナ，クシュティア，ロングプール，ノルシンディ，ジョイデーブプールなどの諸都市において教師，銀行員，商店員，建設現場監督，ジュート工場従業員，バス・トラック・フェリーの運転手などの職を得ている。彼らはG村の非農業就業者の35%にも達している。

家族と共に村を離れている者たちの数は，F村では非農業就業者の約5%にのぼり，彼らはクルナ，チッタゴン，さらにアラブ諸国で民間企業に就職できたものである。同じくG村からは，ダッカ，クルナ，ロングプールなどへ出て，比較的安定的な中級以上の俸給生活を営んでいる。

職種と出身階層

職種と出身階層との間には明らかな相関がみられる。リキシャ引きや船員あるいは日雇い労務者の出身は明らかに最貧階層であり，露店商や行商人等わずかの資本があれば開業することのできる職種も同じく小農階層の出である。より多くの資本投下を必要とする商人，すなわち仲買人，卸売商，小売商などはやはりほとんどは中農以上の階層の出身である。サービス業に従事する者は，一般に小農階層である。中級官吏や会社経営者(支配人)等の管理職に就いている者の出身はことごとく上位非農家階層であることもはっきりしている。ただ，学校，マドラサ，イスラム教師などの専門職に従事するものは教育水準がとびぬけて高く，富裕な階層の出身者ではあるが，貧困層からのしあがってきた者もいる。

職種と教育水準

F村の識字率は43%，G村のそれは60%であり，全国平均の24%に比べてはるかに高い。F村において有業者385人中無教育のものは203人(53%)，初等教育132人(34%)，高等教育修了者50人(13%)で，G村においては有業者176人の内それぞれ40人(23%)，73人(41%)，63人(36%)である。とくにG村の教育水準は全国水準に比べて圧倒的に高い。また，非農業職に就いている者の教育水準は農業者，とくに農業労働者に比べるとずっと高く，子細にみると，管理職，教員，下級官吏，民間俸給勤労者，仲買・卸売商等の教育水準は他の肉体労働者等に比べると有意に高く，また当然ながら教員はすべて高等教育をおえた者のみである。教育水準の高さが，安定的な，社会的地位の高い職種への就職と連動していることがはっきりとわかる。

転職

全就業者の約2割の者が過去5-6年の間に転職を経験している。なかでもより安定した職種への転職，例えば日雇い労務者や船員から官庁雇員や俸給勤労者や自営農業へ，商人から教員・公務員へ，自営農業から教員・公務員，商人・俸給勤労者などへの例がある。彼らの転職の経緯をみると，小・中農階層の者のなかにも，農業労働・自営農業・商業に在職しつつ，マドラサや教員養成カレッジでの高等教育を受けて公務員・教員の職を得たケースを見出すことができる。下位規模の農家出身者でも，教育を媒介にして職業の

階層をのぼる可能性が常に開かれているということである。

2.　村と＜まち＞のインターアクション

どういう職種であれ，非農業職に就業している者たちは，各々の職業を通じて，村と＜まち＞をつなぐエージェントの役割を演じる。村を離れた肉体労務者たちは，少しばかりの現金が入れば入ったで，不安定な職種ゆえ労働機会が得られないといえばいったで帰村し，平均すると年に10から15回は帰村しているようである。農繁期には帰村し，自作地を耕したり，農業労働に雇われたりする。小売・露店商たちは市場を通じて村と＜まち＞をつないでいる。彼らは，村から米，豆類，野菜，果実，ジュート，サトウキビ，菜種油，きんまの葉などを集荷し＜まち＞に出し，＜まち＞からは日常生活に必要な雑貨類を仕入れて村むらの定期市で売出す。行商人たちは近在の＜まち＞に出ては茶，砂糖，たばこ，パン，ビスケット，文房具，化粧品，サンダルなどを仕入れて，村むらを振り荷を担いで売り歩く。自家製の菓子類を売り歩く者もいる。こういう小商人たちは月に少なくとも3－4回はまちに出る。仲買人，卸売商など，少し大きな商いをする者たちは，村むらの定期市で地方産物を仕入れて＜まち＞に出荷し，また当然＜まち＞の雑貨などを仕入れては定期市の小売商人たちに卸売をしたりする。主な地方産物はサトウキビ，米およびジャガイモで，それらをチャンドプールやダッカに出荷する。また，例えば燃材を扱う商人はチッタゴン丘陵県やクルナ県のシュンドルボン（海岸のマングローブ林地帯）まで出かけて政府の貯木場などで薪を仕入れ，船を仕立てて運送し，近在のレンガ焼き工場などに売りさばいたりもしている。

サービス部門等で働く者たちも，その多くの人たちは稼ぎの一部を定期的に村に残した家族に送金しており，これが留守家族の生活費となるのはもちろん，農業経営，とくにボロ期稲作の水利費とか肥料・農薬代として欠かせぬ現金収入となっている。また，土地持ちの者たちは農繁期には帰村し，そうでなくとも祭や祝日にはほとんど必ず帰村する。年間平均して8－9回は帰村しているようである。その折には，＜まち＞のしゃれた品物，例えば衣類，靴，化粧品や季節の果実，菓子などを土産として村に持帰るのが常である。

より安定的な会社・役所勤めの俸給生活者も同じく村との接触を保ち，留守家族には定期的に送金し，その現金は多く農業経営，家計補助，家の修理に使われるが，G村の事例では土地の売買，貸借に使われることが多い。ただし，彼らの帰村はやや間遠くなっているようで，祭などを中心に，年間4－5回というところである。

教師などの専門職の働く場所はほとんど村内か近在の村で，この点彼ら村のインテリ階層は村の生活と密着した暮しぶりをみせるようである。

こうしてみると，より安定的で社会的地位の高い職種への就職には学歴がものをいい，例外はあるというものの，大・中農階層の者のほうがよりよい教育機会に恵まれている。F村とG村の農外就業構造には明らかに違いがみられ，G村出身者は肉体労働に就く者はほとんどなく，安定的な専門職を得た者が目立つ。これは明らかに，G村の高学歴，教育熱心さのあらわれである。その高学歴を支えるのは，F村に比べてずっと高い農業生産性であり，それはチャンドプール灌漑事業という洪水防御輪中堤と低揚程ポンプによる灌漑農業の組合せからなる一大事業によってもたらされたものであることは別に論じたので，ここでは再論しない［Maharjan 1989; 1990; Kumagai and Kaida 1988; 向井　1989］。

農外収入の一部は農業経営，農地取得，家屋の修理・建直し，祭祠の出費などにも注ぎ込まれ，彼らの村内での地位を引上げる。た

だし，ここでは詳しく分析する紙数がないが，職種（なかでも雇員以下）の社会的地位と収入額は必ずしも対応せず，大工やレンガ職人，あるいはリキシャ引きにしても働き次第では，教員・公務員に負けない稼ぎができる。ただ，前者の収入源が極めて不安定であることは認めなければならない。また，個人的な努力と，知人の引き，苦学などを通して職業階層のはしごを昇ってゆく道は常に開かれている。

Ⅳ　ま　と　め

これからの農村の発展は<まち>とのインターアクションの中に求められるのであって，バングラデシュでは農業の発展がそのまま農村発展につながると考えるのは幻想にすぎない。しかしながら，<まち>とのインターアクションといっても，純農村で余剰米を産するボグラ県のT村では，地方の中心的な<まち>の市場を通した経済的なつながりがすべてであって，農外就業による人の移動を通しての交流はごく限られている。一方，村びとすべてが等しく小農であって，かつ集約的な土地利用をすすめてゆこうとすれば経営に必要な現金出費（灌漑用水，肥料，労賃）を一時的にせよ農外就業によって補填せざるをえない，そして農業による余剰収益は商いの元手にしたり，職探しの代金にしたり利用されるようなチャンドプールの2村においては，村びとは競って農外就業を志し，とにかく広く行動するのである。前者の直接の経済圏がウポジラの範囲内にとどまっているのに対して，後者の経済圏は通勤圏，地方のウポジラ，県庁所在地をはるかに越えて，ダッカ，さらにほとんど全国の都市部にまで広がりを見せている。チャンドプールの村びとたちは，すでに少なくともダッカ—チッタゴンベルト程度の地域は自分たちに関係ある経済圏だと考えている。

<むら>と<まち>のインターアクションの様態におけるボグラとチャンドプールの極端な差異は何から出てくるのであろう。第一に，近年の乾季稲作に支えられて農業生産のみで自立的な農業経営ができる地域と，農外収入を稲作経営費にまわすことによって密度の高い農業経営を指向している小農地域との差異である。第二に，「脱農」ということにたいする意識の差であろう。ボグラのT村でも，農外就業に関心がないわけではないが，あくまで兼業とか農産物の商いとか農業経営と密着した職種につくことを漠然と望んでいる程度であって，職探しにもどことなく具体性を欠き，子供たちの教育方針にしても保守的である。村びとの理想像は，あくまでこの村の生活に立脚した，安定した土地もち農家である。それに，なにより，農外就業に関する情報のネットワークが，ダッカ—チッタゴンベルトと比べるとまるで弱い。一方，チャンドプールのG村に典型的に見られるように，彼らは家計の余裕分はまず子供の一般教育に割き，彼らの強い情報ネットワークのなかで，兼業・脱農を問わず農外就業の機会を常時うかがって待機しているわけである。第三に，すでに脱農した村びとたちによる郷里の後輩たちへの情報提供とか「引き」である。これは後者の村びとたちの間でかなり強力に働いていると思われるが，今回の調査では，村を出た者たちの追跡調査にまで手がまわらなかったので，今後追及すべき課題として残しておきたい。

ボグラのT村における観察から導かれる農村地域のあるべき姿は，地方の中心都市を核とした一種の「田園都市型」イメージである。一方，チャンドプールの調査の経験からは，村びとたちに夢を抱かせるに足る，魅力ある農村開発戦略は，首都圏を含むような，ずっとずっと大きな地域を単位として発想しなければならないという教訓がえられそうである。

引用文献

Kaida, Yoshihiro, ed. 1990. *Agricultural and Rural Development in Bangladesh: Tetulia Village and Sherpur Paurashava in Bogra.* JSARD Publication No. 16. Dhaka: JICA Bangladesh Office.

Kaida, Yoshihiro; and Maharjan, Keshav L. 1990. Comparative Studies of Rural-Urban Interaction in Bogra and Chandpur. In *Agricultural and Rural Development in Bangladesh: Proceedings of the Second JSARD Workshop.* JSARD Publication No. 18. Dhaka: JICA Bangladesh Office.

Kumagai, Toru; and Kaida, Yoshihiro. 1988. *Gobarchitra Village and Chandpur Irrigation Project.* JSARD Working Paper No. 5. Kyoto: CSEAS, Kyoto University.

Maharjan, Keshav L. 1989. *Agricultural and Rural Development in Bangladesh: Phanishair Village in Chandpur.* JSARD Publication No. 11. Dhaka: JICA Bangladesh Office.

———. 1990. Impacts of Irrigation and Drainage Schemes on Rural Household Economies in Bangladesh. Ph. D. dissertation submitted to Kyoto University.

マハラジャン，ケシャブ・ラル. 1988.「バングラデシュ農村就業構造の事例分析」『農林業問題研究』92：136–143.

向井史郎. 1989.「微地形・水文・土地利用——バングラデシュ，チャンドプール灌漑計画地域の事例研究」京大熱帯農学専攻修士論文.